

メッセからの子帰復

農林水産部農政課



島川真由美

この三十周年に向けてのメッセージュを書くことが決まったとき、正直に言うところ「隠しているわけではないけれど、わざわざ自分から年齢を公にするのはいかなものか。」というのが本音だったのですが、沖縄復帰という記念すべき年に生まれたということ、これまでの自分の人生と復帰後の沖縄を重ねて考える良い機会を与えていただいたことに感謝しつつ、述べさせていたただきたいと思っています。

昭和四十七年に私が産まれたときには、すでに沖縄は本土に復帰しており、住んでいた地域は基地と隣合せではなかったことから、それ程、米軍統治からの復帰を意識することもなく成長しました。ただ、小さい頃からの風景が刻々と変わっていき、大きな時代の流れの中で着実に沖縄が変わってきていることは実感でき

ましたし、また、自分が成長するにつれ、沖縄が日本の中でも独特の文化を持つ地域であることがわかるようになりました。最近では、そのような独特の文化を持った地域に生まれたことがうれしく感じますし、縦に長い日本列島の中で、沖縄も含めて日本という国なのだなあとしみじみと感じています。

喜ばしいことに、最近はドラマや沖縄独特の食材等、様々な面から全国が注目を集めていますし、私達の世代でも三線や琉舞をはじめ沖縄の伝統的な文化が見直されています。沖縄は決して経済的に裕福な島ではないかもしれませんが、これまで受け継がれてきた伝統文化や穏やかな人柄、美しい海や自然環境等が財産ではないかと思っています。

このような南の島、沖縄を担う世代になって、縁があり沖縄総合事務局で仕事をするということになり自分にも何ができるのかと考えさせられますが、少なくとも、これまで引き継がれてきた沖縄の財産を次世代に残して行きたいと思っています。また、復帰から四十年、五十年と経過していく中で、これからも沖縄の変わっていく部分、変わらない部分を見つめつけていきたいと思っています。

開発建設部技術管理課



豊見山直樹

はじめまして、今年は沖縄復帰三十周年ということで復帰っ子（昭和四十七年生まれ）の職員にメッセージュを書いてほしいと依頼を受け、原稿を書いております。

私は、両親共沖縄の出身ですが、私自身は大分生まれで三歳の時に那覇市の方に引っ越してきました。そのときの印象は小さかった事もあってあまり覚えていませんが、たいした違いは感じませんでした。ただ、自分の親が地元の人と話しているときに違う言葉を話していたのを覚えています。その言葉は宮古の方言でしたが、その時は父が外国語を話せるのかと思ひ驚きました。いまでも方言はあまり分かりませんが、同世代だとそういう人は多いと

思います。ちょっと寂しいですね。

話はかわりますが、私は昨年度関東地方整備局の横浜国道工事事務所に出身していました。昨年はNHKで「ちゅらさん」をやっていた事もあり、ちゅらと沖縄ブームで近くのスーパーでも沖縄物産展をやっていたり、沖縄料理店が横浜の地元雑誌の人気ランキングに入ったり、職場でも海人（うみんちゅ）Tシャツを持っていく人がいたりで、沖縄出身者としては少しの気分でした。親の話を見ると、昔は本土の人に対してコンプレックスがあったそうです。今はそんなことはなく、対等かそれ以上になっている所もあるように思います。

本土に出てみて外からみた沖縄は、まだ独特な部分が残っている日本とは少し違った雰囲気をもった場所というイメージでした。四月にこちらに帰ってきましたが、やっぱり沖縄は最高ですね。これからも沖縄らしさを無くさないように、発展していってほしいですね。